

## “さるぼぼ”の理由

鈴木裕美

今回は、山脇立嗣さん『わたしのこえがきこえますか』、私道かびさん『いきてるみ』、土橋淳志さん『その間にあるもの』の三作が特に優れていると感じた。

『いきてるみ』は四部構成だが、そのどのシーンも新鮮で卓越した独自のアイデアと詩情があり、驚嘆した。『その間にあるもの』は巧みな構成と、思わず吹き出すような台詞や、深く頷いてしまう台詞が、豊かな登場人物によって語られ、非常に楽しめた。お二人とも、今後の作品もとても楽しみだと感じた。

お二人についてもまだ書きたいことはたくさんあるのだが、今回は山脇さんの作品について文字数を使わせていただきたい。

『わたしのこえがきこえますか』この物語の主人公は3人だと言えると思う。父と母と聾者の娘、和美だ。しかし、この娘は舞台上に登場しない。存在としては登場するのだが、父や母の役をやる俳優たちは、テーブルの上に置かれた飛騨の郷土玩具“さるぼぼ”を和美だと見立てて演じることになる。また、和美の話す手話は、手話研究会に参加している人物が通訳することで、観客、及び他の登場人物に伝えられる。

ト書きを引用する。

「母は小さな人形そのものに対してではなく、その先の椅子席に誰かが座っているという前提で、語り続けている。ただ実際そこには誰も座っていないわけで、母が人形に話しかけているように見えてもよい」

「観客席を背にして母と対峙しているはずの和美の座席位置は芝居が終わるまで基本的には変わらない。実際には存在しない和美役だが、芝居上はこの定点に和美がいるということ的前提とする」

“さるぼぼ”の顔はのっぺらぼうである。それに関してはこのような台詞がある。

「持つてる人が悲しい気持ちの時は悲しい顔に、嬉しい時は嬉しい顔に…じいっと見てたらそういう風に見える。そやからあえて描いてないんやて」

私は、山脇さんが主人公を“さるぼぼ”に担わせるという設定を選んだ理由は、和美が今、何を思い、どんな表情でいるのか、観客一人一人に想像してもらいたいからだと思っていた。そして、それはとても効果的だとも思っていた。

ところが授賞式の後、山脇さんは本当の理由を語ってくくださった。それは私にとって少なからず衝撃であり、非常に興味深いものだった。

主な理由は、山脇さん自身が、自分の手話言語の能力が低いと感じているからなのだろう。

それはどういうことか、たとえ話で説明をさせて欲しい。

劇作家が舞台に、英語しかしゃべれない人物を登場させたかったとする。しかし、その劇作家は英語が堪能ではない。こんな場合、どうするだろうか？ 恐らくその劇作家は日本語

でその登場人物の台詞を書き、誰か信用できる翻訳家に英訳してもらって、その英語の台詞を戯曲に書かだろと思う。もちろん、誰か他人に英訳してもらってしまっは、その台詞は厳密に言えは、その劇作家が書いた台詞と言えはだろか、という問題もある。しかし山脇さんが問題にしているのはその点ではない。

翻訳者に訳してもらはうことは、山脇さんにとって意味のないことなのだ。なぜなら彼にとって、その英語しかしゃべれない登場人物の台詞こそが、最も書きたい台詞だからだ。自分はネイティブではないので、その台詞を書くことができないが、翻訳家に頼むのでは意味がない。そこで彼は考えた。「その英語話者の台詞は、舞台上には聞こえない設定にしよう。それを通訳する登場人物の言葉という形で、観客に伝わるようにしよう。しかも、その通訳は、英語を勉強し始めて日が浅い人という設定にすれば、自分自身でその人の台詞が書ける！」

この説明でお分かりいただけただらうか？

山脇さんは、手話という言語で戯曲が書きたい。どうしてもだ。しかし現時点の手話能力でそれは不可能なので、編み出した苦肉の策が、聾者の和美の役を“さるぼぼ”に担わせることだったというのである。言葉に責任を持って戯曲を書くということに対しての、なんという誠実さと熱意だらう。

しかし、ここで私たちは、新たな問題に気づかざるを得ない。

もし山脇さんの手話能力がネイティブレベルになったとして、手話言語で話す登場人物の台詞をどうやって戯曲にするのだらう？ そうなのだ。手話言語は文字にできないのだ。いや、できるかもしれないが、それは口話言語に翻訳されたものでしかない。そして山脇さんはこれからも「活字として記録できない手話言語を文字媒体を使わずにいかに『戯曲』とするか」を追求していくと言う。

『わたしのこえがきこえますか』は数多くの美点がある。私たちに知らなかったことを知らしめ、気付かせ、考えさせてくれ、それが全く説教くさくない。チャーミングなアイデアにもあふれている。しかし最大の美点は、彼がこの戯曲を書かすにはおられず、そのご自身の衝動に、愚直と言えはほど正面から取り組んでいることだと思はう。

山脇さんの戯曲と彼自身に出会えたことは、私にとって大きな衝撃だったし、今回はどうしてはそれを書いておきたかった。

今後、様々な形での「戯曲」に出会えることに期待したいと思はう。